

東京学芸大学附属国際中等教育学校教諭 愛甲 修子さん

東北ツーリズム大学遠野キャンパス11月講座は、東京学芸大学附属国際中等教育学校教諭の愛甲修子さんを講師に11月22・23の両日、あえりあ遠野などで開かれた。農作業や農家との触れ合いを体験した同校の修学旅行や、その後も続く遠野の人たちとの交流の経験から、「遠野の魅力」を探る。

SPECIAL
INTERVIEW

スペシャルインタビュー



「ここに住んでいる人が、
うれしい・楽しい・ここがいいと
思っていることが、いいまちを
つくっているんだと思います」

今の生活を楽しんでいること

まちづくりの考え方に共通すると思います。住んでいる人が「うれしい・楽しい・ここがいい」と思っていることが、いいまちをつくっているんだと思います。遠野の人たちは、それぞれに夢を持っていて、これからこうしていきたいということをよく語り合い、聞かせてくれます。このような大人の思いが、結果的に子どもの生きる力を育てているのだと思います。誇りを持って作業する姿や、大人が語る夢は、将来に希望を持たせてくれます。だから子どもは頑張ろうと思うのです。そう思わせてくれるところが遠野の良さで

はないでしょうか。そこに住んでいる人たちが、今の生活を楽しみ、そうして子どもたちと接してくれることが一番いいことなんだと思います。

「遠野ならではの」修学旅行

中学三年生の修学旅行で、これまで三回遠野を訪れました。そのうち、〇六年には遠野で二泊し、農作業を体験したり、まちづくりの提案や遠野中サッカー部との朝練習をしたり、いろいろなことを体験させていただきました。

ほかの年度には、遠野以外の場所で農作業を体験しているのですが、感想文には「採れたての野菜がおいしかった」というような感想が挙げられています。しかし、遠野の感想文では「誰々さんの家に行った」というように固有名詞とともに語られているのです。遠野の農家の人たちが「東京の中学生」ではなく、名前を呼んでくれたことが大きいと思います。普通だと、修学旅行が終われば「気持ちを切り替えて勉強に取り組みましょう」となるのですが、遠野でお世話になった人との手紙のやり取りがその後も続くなど、「あの時こうだったね」とか「あの人は今どうしているのかな」と考え続けられる遠野



1 遠野ふるさと村の田んぼで、泥の感触を肌で感じながら田植え体験をする生徒たち (2006年)

2 それぞれの受け入れ農家に分かれて、畑作業に励む生徒たち (2006年)

3 高校2年生となった遠野倶楽部のメンバーは、今年3月にも遠野を訪れた

での修学旅行となりました。

人とのつながりが財産

修学旅行に行く前に、農家に何かを残せないかと考えていたところ、受け入れ農家の糠森隆さんに「それは、人とのつながりなんじゃないの」と言われました。修学旅行が終わった後も「遠野に行ってみようかな」という生徒がいれば、それは残したことになると。そこで、遠野とのつながりに何か種をまけないかと思い、生徒の有志らで組織する「遠野倶楽部」をつくりました。〇七年の春に遠野旅行を企画したところ、クラスも部活も、進学した高校も別々の十五人が集まりました。遠野という共通点だけで集まった仲間たちでした。二回目となった今年春の旅には四人が参加しました。今回は生徒自身に企画を任せ、こうすればワーキングホリデーに参加できるんだということを体験させました。

遠野に求めるものとは

「遠野に求めるもの」ということを考えたときに、こんなことが見えてきました。一つには教師、親と子どもとの関係と、農家の人と子どもとの関

係が違うなど感じました。修学旅行の感想に、体験そのものよりも、人との触れ合いが良かったと書く生徒が圧倒的に多かったんです。「農家の人たちは温かい」という表現を生徒たちはしていました。先生や親は、常に上から子どもを見ていて、こういう目標を立てて、ここまで到達しなさいよという教え方をしています。常に「あしなさい」「こうしなさい」と指示を出しますが、一方農家では、おばあちゃんに「あなたたちはわたしの孫だよ」と言ってもらえたり、農作業をして「ありがとう」と言ってもらえたりすることで、自分の存在を認めてもらえたと感じる。それが「温かい」という表現につながっているのかなと思います。

昔であれば、子どもは親が働く姿をよく見ていましたが、今はそれが少なくなりました。農家の人は自分の技を身に付けているので、その姿を目の当たりにした子どもたちにとって素直に尊敬できる存在なのだと思います。整った施設や体験メニューなんて特別なものは必要ありません。自分の生活に誇りを持ち楽しんでる姿を見ることが、生徒たちにとってはすごいと思えることなんです。

PROFILE ◎あいこう・しゅうこ
1991～2006年度まで東京学芸大学附属大泉中学校に勤務。担当教科は国語科。2006年度に実施した遠野を中心とした修学旅行の企画・運営に際しては、私費で何度も実地調査を行うなど遠野に対する思い入れは強い。東京都在住、43歳。